

特集

この目でみた 新潟県中越地震

〈最大震度7〉

10・23新潟県中越地震の衝撃は大きかった。被災した中央大学の関係者も少なくない。そのなかで、いち早くボランティアで現地入りした学部生たちがいた。その生々しいレポートとルポである。

「理工ボランティア&災害調査団」 3日後、震災の現地に入った

理工学部土木工学科2年 蛭間芳樹

体験した「震度6弱」

だった。

総勢7人、十日町市へ

「あれっ……。な、なんだ!? うわっ!!」

突然、下から垂直方向に突き上げられ、続いて息を呑む間もなく経験したことのない大きすぎる横揺れを受けた。目の前の木造家屋は崩れそうなほど「せん断変形」をし、電信柱はまるで振り子を逆さにしたかのように振動している。ガタガタと物が奏でる不協和音は僕たちの危機感を煽るばかりか、万が一の事態すら想像させた。足元がふらつきながらも僕たちは身の安全を確保し、その場に立ち尽くした。

10月27日午前10時40分ごろに発生した余震である。僕たちのいる新潟県中越地方は震度6弱を記録していた。現地入りして翌日の恐怖体験

10月23日、土曜日。ニュース速報で地震発生を知った。「震度6強」

地区のなかに「十日町市」があるのを見て、僕のなかで瞬時に、ある色褪せた微かな記憶がリンクした。僕が小学生のころ所属していたサッカークラブが毎年夏合宿で参加していた大会の会場兼主催が十日町市だったのだ。多くを考えるより先に、携帯電話で土木の友達に連絡を回し、有志を募った。

僕自身、被災地へ行ったこともなく、ボランティアの経験もない。特に何をするのも分からないまま、ただ「現地へ行くのだ」という衝動的な思いだけが僕を動かしていた。

中大理工学部土木工学科2年生か

ら成る「新潟中越地震ボランティア隊&災害調査団」、総勢7人。講義を休むこと、自分の所属するところとの調整、バイトを休むこと。個々の事情を超えて参集、結成されたメンバーである。

地震発生から3日後、26日——朝の6時半に、僕たちは十日町市へ向けて出発した。

キーワードは「自己責任」。自分たちの食糧や使う水を持参することはもちろん、寝る場所は車内、さらに現地では余震が続いている状態なので万が一の場合も踏まえたうえで行くのだ、と心に決めた。

7人十荷物十5日分の食糧十水十防寒の毛布などを積み込んだワゴン車は、何度もきしみ悲鳴をあげた。三国峠を越えると道路の亀裂・陥没、土砂崩れが目立つようになった。別世界に踏み込んだような、悲惨な光景がリアルに押し寄せてくる。心臓の鼓動が早まるのを感じた。

それでもなんとか無事に、十日町

市にたどり着いた。4時間ていどで、
という甘い目算は崩れ、出発からじ
つに7時間を要していた。

無人の街中

十日町市は周囲を山に囲まれ、国
道117号が町の中心を走っている。そ
れに沿うように商店街が並び、また

枝分かれした道路の先に学校・集会
所・公民館がある。豪雪地帯を思わ
せる特徴ある家は静かに立ち並んで
いて、町の標識や看板を見渡せばそ
こが雪国の町・観光の町であること
はすぐに認識できた。そして、僕は
懐かしさを覚えた。

そのなかを、支援物資運搬車、自



アメのように倒壊した家屋=十日町市内

衛隊の車、パト
カーが赤色灯を
点滅させながら
ひっきりなしに
行き交っている。
住宅に、商店街
に、歩道に、人
がいない。町全
体が失望と絶望
に浸ってしまった
たかのようにも
見えた。

この現地で、
僕たちは30日ま
で5日間滞在し
て動き回ること
になった。

ボランティア組織づくりから

ボランティアセンターを運営する
土台（人・システム）がまだ整って
いなかった。50人ほどがいたが、避
難勧告が解除されない限りボラン
ティアの具体的な活動（家の内部の
片付け、掃除）はできない。僕はこ
こで初めてボランティア活動が各個
人バラバラで行うのではなく（もち
ろん、そのような形で活動している
人もいるが）、あるていどの組織を
つくって動くものだと思った。この
ような取り組みは、ボランティア元
年ともいわれる阪神大震災の経験か
ら生まれたものらしい。

早急に、機能的なシステムを組織
化する必要がある。比較的、長期滞
在する予定の僕たちは、そこで「統
括スタッフ」という任務を割り振ら
れ、みずから行動すると同時に今後
増えるボランティアの人たちをどう
配属するかを決める役割も担うこと
になった。いわばセンターの核のよ
うな立場に置かれたのだった。

試行錯誤を繰り返しながらも、27
日には機能的に動く組織が立ち上
がった。

市内を回って各避難所単位でニー
ズの吸い上げに取り組むことが最初
の仕事である。避難所は全部で13
0カ所にもなる。地形的な場所やそ
こに避難している人によってニーズ
は大きく異なるため全てが調査対象
である。優先順位など存在しなかった。
避難所での調査は、まず代表の
方に全体的な話をうかがい、さらに
お年寄りから子供までできる限り話
をするのであった。1日かけて立
ち寄れる数は5〜6カ所がせいぜい
だった。

孤立した避難所で

移動中、とある小さな保育園に人
が集まっていた。一見、他の避難所
と何ら変わらない様子だったが、聞
いてみると耳を疑うような話である。

ここは近所の人たちが集まってできた、市が認識している範囲外の避難所だった。支援物資の食糧や毛布、

水すら全く配給されていなかったのだ。「なんとか自分たちの蓄えでやってきたのだが、今日の昼飯でもう底をついてしまった」という。僕は直ちにセンターへ連絡をし、準備できる物資を届けた。その後、市の確認作業がなされるまでの間、それらを届け続けることになった。ここだけではない、他にも同じ状況のところがあるはずだと不安になった。

また、ゴミの問題もあった。27日から通常のルートで回収が始まったのだが、ゴミが山積している避難所までは回らない。持参すれば受け取るということなのだが、そのような行動を起こせる被災者はごくわずかである。処理場の運行時間も平常通り。もっと長い業務をと思えるのだが、処理場で働く人たちも同様に被災者なのである。衛生上、重要な問題にもかかわらずとても難しい。

お年寄りと話しこんだ

避難所を回っていて、やはり一番気になったのは高齢者の方々である。大半の方が横になって寝ていらっしやる状態だった。一日中、同じ場所と同じ姿勢でいることがどれだけ辛いことかと思うと、僕はやるせない気持ちでいっぱいになった。

僕にできることは、できるだけ多くの高齢者の話し相手になることだった。すると、生の声が返ってくる。「家から避難所までの500メートルほどの距離を1時間かけてやると来たんだよ」というおじいちゃん、「温かいお茶を飲みたい」とおばちゃん、「体を動かしたい」人大勢。簡単な調査では吸い上げられないニーズを聞くことができた。なにより、「話し相手になってください、ありがとうございます」という言葉をいだけたことがうれしかった。その他にも、学校の先生からは、授業が再開しても学校の床・壁・ガ



避難所でおばあちゃんと

そのギャップを少しでも埋める手伝いをすることだと僕は思う。衣食住に関する最低限の支援は物として被災者の手元へと渡る。しかし、被災者が必要としているもう1つの重要なものはなんだろう。被災者一人ひとりが心をもった人間であることを忘れるべきではない。言葉ひとつでも心が元気になることを、お年寄りの表情から僕は学んだ気がする。

被害調査

土木工学は「市民工学」

二丁調査で車を走らせつつ、僕たちは被害の目立ったものは随時写真に収め、場所・時間をメモした。土木工学の分野と重なるので写真の総枚数は800枚を超えるものとなった。道路の亀裂・陥没、水道管の破裂、家屋の崩壊、土砂崩れ、堤防の決壊など、言い方が悪いかもしれないが、どんな教科書よりも勉

ラスなどが非常に危険であること、子供たちは遊びたくてうずうずしていることを聞いた（子供たちのためにプレゼントしたアメは大人気で、遊んでくと頼まれたりした）。病院ではいつも以上に注意をはらって管理と医療行為をしていることなども調査で分かった。二丁は多種多様で、しかも時間経過によって変化もしていく。どうしても役所だけでは把握できない部分がある。そのことを一概に責めることはできない。ボランティアとは

強になるリアルな資料だった。僕は「この亀裂はここに力が左から働いてできたのだろう……。これが液状化？ この土の物理的特性はなんだろう？ この構造は……」などと、ズタズタの現場で盛り上がりましてしまった。

道路は地震が発生して4日目には修復工事を開始していたし、上下水道管の点検などのライフラインに関するものの対応の早さに驚いた。また、僕たちは現地で調査等をしているコ



ボランティアセンターに貼られた「すべては被災者のために」

ンサルタントに専門的な手伝いを依頼されてしまった。興味はあったのだが、ボランティアセンターの「危険すぎる」という判断を受け、結局断りを入れた。

ふだん僕は、黒板や机の上で単純化されたそれと向き合い鉛筆を動かしている。地震についても大体の想像はつくが、それがいかに衝撃的で想像をはるかに超えるものであるかは、リアルな現実を見なければ決して分かるものではない。

専攻の土木工学とはCivil Engineeringの訳であるが、Civilとは市民。「市民工学」とも言うことができ。インフラ整備はもちろん、人が生活するうえで必要な物・基盤・安全・システムを相手とする、「とても雄大でとても繊細な学問である」といま考える。5日間という短期間ではあったが、認識が改まるほどの

体験だったのである。

思いの繋がり「被災者のために」

センターには、年齢も性別も職業も肩書きも、じつに多様な人たちが集まってくる。地元の人、受験を控えた高校3年生、IT関係者、看護師、医者、大学教授、高校教師、大学生、フリーター……古い師もいた。そんな交わりのなかで、さまざまな考え方や思いを感じることができた。ただ1つ、そのセンターに来た全員に共通するのは

「被災者のために」

という思いであった。遠く北海道や広島から来ている人もいらっしやった。「思いの繋がり」に僕は感動した。

ボランティアの人数も徐々に増え、平日には200人、土日は500人を越える人が集まると聞いた。なかには肩をひそめる場面もある。「夜に体を温める」程度ではとてもすまない深酒をして絡んでくる人も実

際にいた（僕たちが絡まれた……）。報道では「ボランティア詐欺」も存在するらしい。心の中で憤りを感じるだけだった。

食事は持参したパンやカップラーメンを食べ、水も持ってきたものを使った。炊き出しで余ったおにぎりをいただいたりしたが、さすが新潟魚沼産コシヒカリはおいしかった。寝る場所は基本的に車内。ミゾレまじりの雨が降り最低気温は2度となった27日の朝は寒くて途中何度も目が覚めた。余震も絶え間なく続き、安心して眠れる日など1日もなかったといっている。

ボランティアとして現地に行きだうんしては何にもならない。なんとか5日間、非日常的な世界で激務をこなした7人全員が体調を崩さず、これといった大きな問題もなかったことが何よりであった。

「支え、支えられる」

僕は、毎日寝る前に反省会をやる



松井さん（前列左）たちと一緒に（後列右から2人め・蛭間）

うと提案した。一日を振り返って、動きの確認、良かったところ、悪かったところ、どう改善するかなど、みんなが意見を出し合うのである。

ここで激論も生じた。自己責任という言葉をどう理解すればいいのか、各自バラバラだったのである。ボランティアで来たのであって、その準備もして来たのだから食べ物・寝る

場所は現地の人（被災者）の親切も遠慮をすべきだ。一方で、僕たちのことを思って親切にされているのだからお世話になってもいいのでは？という意見。長い日には1時間半もの話し合いとなった。

議論があるのは当然でもある。他のボランティアの人たちの意見を聞いても同じようだった。対応もま

まちなのだが、なるほどと教えられたのはこんな言葉である。

「ボランティアの人って被災者の人たちを助けに来たのではなく、支えに来た。支えることは支えられることだよ」

ボランティアを何回か経験されている人からいただいた言葉である。そして、ふと松井さん（寝る場所などでお世話になった人）の

ことを思い出した。

「君たち頑張りすぎだろ。ここでゆっくり休むか、車貸すからどこかゆっくり回って来いよ」

僕らのことを心配されている様子が明らかにかうかがえたのであった。

結局、何もかも全部を自分たちで賄う必要はないのかもしれない。僕たちはスーパーマンではない。自分たちができることを全力で行い、できないことは支えてもらう。メンバーとの激論でそんなシンプルなのに気がついた。

「心を元気に」と祈りながら

帰る時には必ず顔を出せと、何度とも言われた僕たちは松井さんのものへと向かった。松井さんに感謝の気持ちを伝えると、松井さんは僕たちのことを愛おしむように、ねぎらい、言葉をかけられた。過分な心遣いに

熱いものがこみあげてきた。次にセンターの皆さんのもとに挨拶へと向かった。短い間ではあったが、その

感想や思いを綴った紙を7人分渡した。挨拶をすると、センターの人たちが握手や写真を撮ろうと、次々に集まって来てくれたのだ。正直なところ、もっといたいという気持ちはあったのだが仕方ない。気持ちを切り換えて、30日、十日町を後にした。澄みきった青い空から、降り注ぐ太陽の光がとても眩しかった。

いまもなお、余震は続いている。冬、雪が追い打ちをかける。なお避難所生活が続ける人たちの様子をテレビで見ながら、実際に話をした被災者が気がなる。日に日に修復へと向かっているようだが、現実はどうなのだろうか……。

「心を元気に」と強く声援を送りながら。

参加メンバー

大沼史佳▽榎木亮平▽菊池慶▽小
林啓明▽後藤岳久▽寺岡靖裕〓とも
に、理工学部土木工学科2年。